

所属・資格 心理学科・助教

申請者氏名 望月 正哉

研究課題		身体基盤性を考慮した日本語概念の処理特性に関する検討
報告の概要	研究目的 および 研究概要	概念に対する意味処理では、カテゴリ関連性といった言語学的統計量が影響を与えるだけでなく、身体的基盤に関連をもつような心像性や身体対象相互関連度なども影響を与える。本研究では、特に動詞を対象とし、身体動作を表現する動詞と、内的思考を表現する動詞の意味処理に違いがみられるのかを検討する。具体的には、動詞に対して語彙判断、カテゴリ分類、命名を行わせ、その影響を比較し、身体動作を表現する動詞に特異的な効果がみられるか検討した。加えて、身体動作を表現する動詞に名詞を組み合わせることで生成される比喩的な動詞句を呈示し、身体動作を示した動詞句との違いがみられるのかを検討した。
	研究の結果	研究概要に基づき2つの実験的研究を実施した。第1の実験では、動詞に対して視覚単語処理課題を実施し、身体動作との関連性が強い動詞のほうが課題処理が効率的である（処理時間が短い、正答率が高い）ことを明らかにした。これは特に意味処理が必要な分類課題で顕著にみられ、身体との関連性は特に動詞の意味理解の段階に影響する可能性を示唆した。第2の実験では、対象となる動詞に先行して、具象性の高い名詞や、具象性の低い名詞を提示することで、具象的表現や比喩的表現を連想するような状況での動詞の処理について比較した。その結果、身体との関連性が強い動詞であっても、名詞との組み合わせによって処理に抑制的効果がみられることを示した。しかし、名詞と動詞の提示間隔を広げるとそのような効果は減少することが示された。
	研究の考察・反省	2つの実験とも概ね予測どおりの結果が得られた。本研究から得られたポイントは次のとおりである。(1) 動詞単独では身体動作との関連性が影響するが、それは課題志向的である。(2) 名詞と組み合わせることによって身体動作に関する影響は柔軟に変化し得る。これらの結果は、概念処理において身体基盤性が影響することを示すが、必要不可欠なものというわけではなく、文脈志向的に変化するというを示す。本研究は、いずれの実験においても単語のみを提示してその処理を検討するものであった。今後は助詞を追加して動詞句レベルでの処理の検討や、動詞単独に対する処理ではなく、句全体の処理を求める必要がある。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>研究成果物 The flexibility of association between temporal concepts and physical space in the Japanese language. International Journal of Psychology (Early View) 27 September 2018 International Union of Psychological Science</p> <p>研究発表 日本認知心理学会第16回大会 道具を用いた把持行為の観察が視覚的注意に与える影響 平成30年9月2日/立命館大学</p>	